

● HAIKU199701sono1

くさぐさの彩青天に帰りけり
家裏のしじま育ちの實千両

枝ぶりのこれは若さの冬けやき

立姿どこをおしても冬櫛

正したきそこな枝ぶり枯いてふ

龍の玉なんぞ詠む季来たりけり

手を入れてみれどまだまだ龍の玉

鎌倉と北鎌倉の間を冬日

鎌倉の閑南天の實のほとり

臘梅のつりがね花に落ちゆく日

水仙の方丈育ち遅育ち

筋のよき松と仕上げし松叩き

友垣の大藪椿いつ落ちし

冬桜風が間引きし花の隙

すり抜けてゆく風ばかり冬もみぢ

かるく掌を握りつくれる拳冬

本支え直す親指年の内

蒲団のずれ直し呉れをる妻をうつつ

● HAIKU199701sono2

見較べて弓手（ゆんで）のよけれ冬牡丹

手をもんで手をあたたむる冬牡丹

首かるく傾け見入る冬ぼたん

茎も染むその色よけれ冬牡丹

正面のまたその横の冬牡丹

葉並びの間合又よき冬ぼたん

茎の朱をその葉も貫ひ冬ぼたん

口々にこれはこれはの冬ぼたん

床几あり背合わせに見る冬ぼたん

真っ直ぐに目を据へて描け冬ぼたん

ほうほうと薄日を戀へる冬ぼたん

冬ぼたん前にし夫婦一組づゝ

冬ぼたん風に正せるみどりの葉

冬ぼたんこゑを一つに讃へ合ふ

人の背に溢るる日差し冬ぼたん

婀（あだ）ぶりも子持高尾の冬ぼたん

緋衣も鎌倉一の冬ぼたん

なかんづくこの冬ぼたんこの緋色

愛宕神社

うすらひの封ず風跡くきやかに
平九郎梅の花数まづまづや

角力好き患者綿子にくるまれて

患者らにけふは誰来る寒日和

薄氷をつつければ震ふ其処が縁

容態の落ち着いてきぬ蜜柑など

まんまるに氷りついたか朽葉の水

掃除刻綿子引っ懸け患者らは

カテーテル検査（心臓僧房弁閉鎖不全）の

退院のふるまひざぼんを一つづゝ

ため慈恵医大病院に入院

心臓の直し利く内暖を待つ

湯気立つなか新入患者案内さる

心臓の戸口の直し春にせむ

測温測圧検尿採血春隣

看護婦の大き叱声春隣

看護婦の一語納得サイネリア

寝て覚めて脈をとらるゝ病ミなまこ

ふつつかな海鼠物云ふ患者食

患者食千人力の人参出づ

懇ろになりて睦月の患者食

病床 空想二句

齊の國響郡の俎村

箸つけて雑煮ヶ浦の煤け餅

慈恵の棟灯ししよんぼり霜夜なる

霜旦やひたすら歩く患者ゐて

雪片を取らむと患者足ふらつく

大部屋に一つ空き出来春隣

2月8日内房館山に下田稔さんと一泊
州崎灯台の先の伊戸部落のストック畑
と千倉白間津の花摘み畑を吟行

白間津では花菜の沖合に今様勇魚(いさな)
潜水艦が現われてびつくり。蕪村は

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ と詠んだが。

州崎近くの小漁港西川名ではさざえ、不鯛
(ぶだい)、金目張、メジナ等が揚がって
いた。このほか箱河豚やカワハギ。三の字
又は三の次、字はどう書くのか判らないが
尻尾に三本線が入っている長屋のはつつあ
ん

の弟分みていな奴がかかっていたがぼいと
海へ捨てられた。房総の春は生きのいい春
だ。

旧正のはつかに挙がる沖つ波

旧正の波旧正の波を押す

雛罌粟のごとき欠伸を内房線

半島の椎楯打ちて春の電

半島の出鼻さざゑの水覗突漁(みずきりよ
う)

ふなばたに鬼殻さざゑ揚げられし

近海もの今は不鯛(ぶでい)とさざゑが旬

醜男(ぶおとこ)のぶの面持ちの春不鯛

網剪りて安房の春先き不鯛抜く

かははぎの尾鰭背鰭の鰭拍子

魚籠のかははぎもうおだぶつの顔したり

箱河豚の箱つままれて捨てられぬ

揚げられて菜の花いろの金メバル

手に踊り春ことぶれの鷹の羽鯛

風上に鉄高鳴る花菜晴れ

うみそらに矢車草の彩とびぬ

篠囲ひして金盞花まだ葉がち

一目見ん安房の花菜と化す胡蝶

菜の花化して蝶となるには長け過ぎぬ

突端に来てそら豆の花の道

ストックの嗚呼このかほりこのかほり

ストックの蒼ほのほの睡くなる

ストックを剪るやほろほろ虫発たせ

ストックの徒ならぬ香に浸り来ぬ

雛罌粟の花待つ蒼殊勝なり

菜の花の日中に溶けてしまひけり

花菜畑尽きぬ当家の道借りむ

金盞花畑の村へ臨時便

花摘み村二つ田返しはじまる田

そそくさと其処立たずとも春の蠅

春の蠅舞ひ降る音もらせん状

操舵室数多計器に春日差し

男っ気世帯大内雛飾る

庭石の角々も又春めける

挨拶が上手な妻や桃の花

雛調度牛車（ぎっししゃ）より誰が降りにけむ

人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ

幹照らす春月チャンチンモドキの木

陰る日に臆病咲きのクロツカス

奉書めく葉を先づ立てぬチューリップ

壁土の温みを直に春の蠅

着膨れて心臓外科に繋がれぬ

日にぬくむ庭石伝ひ蠅の子来

オペ承諾魚氷に上るこちちなり

蠅の子の葉蘭広葉にゝ（ちゅ）と止まる

ためらひつゝ氷ついたる水ならむ

鶯餅つまむに作法あるごとし

笹の葉を縦に封じて氷りけり

一ト夜一ト夜雨も交えて春近づく

朝日浴び鴉の嗚呼も春めきぬ

すっかり春我等がビルも霞に入る

冬並木時間の間合とるごとく

春を感じ来してふ朝の顔に遇ふ

亀の鳴く頃を俳句に精出さむ

着膨れてゐてはごたつく句ばかり出来

建長寺

巨福山梅は百木（ももき）に先立ちて

やや明るき春星足場に春星見る

枝々にうるみ初めたる春の星

春星としての持ち味青赤黄

模糊として風に吹き消ゆ春星も

春星の明さ比ぶるものならず

● HAIKU199703sono2

句仲間は吹雪吹き荒れる北海道へ流水見た
さに70名ばかり

飛んでいった。こちらはもっと暖かい処と
避寒の桜狩りの誘いあり。

河津の緋寒桜と伊豆高原大室山の山焼き
だ。

河津沢田の涅槃堂もついでに参拝。

えいほうと松も春めく東海道

やうやうに春の虹立つ国府津沖

誘ひありそれも避寒の桜狩り

かわず掛け河津祐泰が郷里（くに）のさく
ら

伊豆の空春を大きく取り入れて

半島のももいろがかる春雑木

半島のここまで来れば花は五分

踊子号避寒の客を零しゆく

春潮にをりをり差せる風の翳

避寒地に降り立ち一本目の櫻

ここ河津緋寒桜の田舎咲き

海渡りさくら咲かせに一暖雨

河津桜暖雨小止みに小鳥現れ

鳥くくと緋寒桜の緋の暮れぬ

花懐鳥の翔び交ふ十文字

ぱらぱら来る暖雨楠より鳥発たせ

楠楯に取り付く島もなく暖雨

鳥ごゑの暖雨籠りに楠大樹

油菜の葉に珠なせる日照雨

フレームに三色（みいろ）室咲きカーネー
ション

いちめんの花菜みつばち見えてくる

菜の花に虻は呪文を切るごとし

聴きはさむ天魚（あまご）解禁河津晴れ

半島の先はそこなる夏みかん

下田兄

春の夜を菓だのみに眠る術

満面をくすぐる花菜畑明かり

しやうぶ苗田水やうやう明けてきぬ

湯治客河津桜に浮かれ出づ

川音の川遡る芹の水

河津郷七抱七楠の唯一の現存木

七抱大楠たつぷり暖雨吸ふ

轉れり横網格の大楠も

避寒客枯れはまゆうの駅にて降る

恰幅よき蘇鉄に朝の一暖雨

蘇鉄圖にあらず暮春の蘇鉄なり

一縷急き一縷はゆるく春の水

まんさくの風に瞬く幾星雲

ひよひよと大島桜吹かれをり

菜の花にはぐらかされてゐる月夜

海つ方空の明るう夏みかん

肌着いちまい違ふ温さにげんげ摘む

水面を凹ます風に川鶉発つ

湯ぼてりの顔はいびつかダツフオデイル

春草に当たたらぬやうに土竜の頭

鳥らいそいそ河津桜の原木へ

夏みかん扇開きにさし込む日

涅槃堂分葱をもってあそこらと

溶岩原に向かふ山火の急先鋒

螺髪また真青に涅槃し給へる

焰（ほむら）焰を呑んで大きく山焼く火

釈迦牟尼佛むくり起きそな春陽気

山焼く火千軍万馬の征（ゆ）くごとし

暖気雨気善星皆来涅槃堂

山火爆ぜ爆ぜては山を呑む勢ひ

ねはん像なれば頭の向きあらん

面にさす山火の火勢払い退け

涅槃像堂守の子も覗きに来る

山火ぐんぐん弾きゆく音日向の音

梅柄の枕に涅槃し給へる

山焼きの灰のわらわら頬を打つ

輪番の堂守の子の雛遊び

太陽の坩堝真上に山を焼く

畏くも堂古畳ねはん像

山焼に煤けごころを払ひけり

涅槃像もぞと合はせる分厚き手

山火じよりじより青草むらの根を焦がす

山を焼く日和上々萱の艶

山を焼く音の漣火の漣

たつぷりと日を浴み山焼き前の萱

突風に打って変わって山焼く火

はっきりと焼かるゝ前の山の萱

なまぐらの山火道端焦がしをり

山焼きの本日日和風向きよく

小走りに山火隠るゝ一起伏

山焼きの付け火ちよんちよん小走りに

山焼きの灰降る里のくさぐさに

山を焼く煙くすりと挙がりけり

山焼きの半ば済みたる顔ゆるむ

萱の裾山火黄煙挙げにけり

焼山のだんだら日向に雲雀降る

手をゆるくつなぎのぼれり山焼く火

焼山のほとぼり鴉覚ましけり

気紛れな山火すすつと山の肩

焼山のすすけ草株こんもりと

山焼きの済みし日向に雲雀降る

山焼きの済みてふすぼる茎一つ

風廻りよくて山焼き了りけり

焼山の段だら縞に日の新た

焼山の匂ひうするゝ日に風に

通り魔に遇ひし面持ち焼山は

一茎の焦げ目まだらに山火消ゆ

焼山の焦げ目曼陀羅日表に

燃えさしに山火の火力そこそこや

焼山は心腹の友さながらに

山すつかり焼かれ一大古墳めきぬ

焼山の灰のほろりと道よぎる

くさぐさの白き灰黒き灰山焼かれ

山焼かれ草むら隠りの径失せぬ

焼山にほっかり白日当たりけり

山焼き済みお天道様も一安堵

山火果つ白きは蓬の灰ならむ

ビスケット色の三つ四つ春の雲

良性の雲のはらわた春の月

頭角を現すごとくチューリップの芽

古草の上を鳥の頭行き来せり

古草となりし賑はひ天下（あまがした）

阿呆陀羅經極意は桃の花に聞け

パンジーの臙脂びろーど生地めける

やっどこさ花を付けけり君子蘭

枝々の光放ちて春の雨

莢透いて海の日とほる豆の部屋

春雨に何を啄む畑雀

春雨のほろつと零るゝところをみる

春雨の音小止みなく畑昏れぬ

家しんと葉の鎮まれる君子蘭

春雨に庭土の面瞬ける

春雨にびくりと竹の葉末かな

植込みのそここ春雨音立つる

立て初めし畝々を打つ春の雨

雨まみれ木五倍子は光の三角錐

揺れ出して息呑むほどの山ざくら

人の出も日増しにソメイヨシノかな

日本語乱れ初めても山櫻

花の風鯉の背鰭を吹きにけり

枝伝ひさくらの風のうねり起つ

妻も亦口をつぐみて山櫻

白湯の湧くやうに大島桜咲く

落ち木五倍子古る谿底の道あゆむ

魚踊るごとくに鴨や花の隙

花こぶし花混み合ふてうるさかり

花辛夷はたきづかれし思ひかな

花房にぬきさしならぬ空のいろ

桜咲く空の色真似わたつみは

花透ける光光を返す幹

天照らす尊のごとき山ざくら

花の風誘ひて次の花の風

大桜旧軍港の空鳴りて

柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を

花房を離れし風の行方かな

山桜お天道様に膨らめる

雨あとの幹の締まれる山櫻

鉛筆を走らす花鳥諷詠漢

雪解山降り注ぐ日は天蚕糸

山葵田の小石に当る水の音

二年ものわさびの花に穂高の日

蝶追ふてわさびの花も飛びさうに

巣箱懸け穂高赤松天然林

色合ひもやばな櫟の芽吹きかな

付け足しにそこらの小木も芽吹山

芽吹かんと樹皮を寄る辺の洞櫟

同齡のりんご若木の花連ね

緑さす籐編み籠に籐の鳥

碌山のタッチ若葉のやはらかさ

道祖神巡り代田を迂回して

代田に張る水は信州味噌のいろ

推力の一桁違ふあめんぼう

南無南無と円光負ふてかいもちかき

まいまいの気合ひの入りし一円相

まいまいの各々堂々巡りかな

かがんぼの脚踏み外す鬘草

下駄鳴らすごとし古刹の山蛙

接骨木のおおどじ踏んで咲きにけり

早起きに天気がよくて出開帳

出開帳頭の間のご本尊

御開帳回向柱を撫で廻す

櫟一気ならざる芽吹きかな

人拒む色をとほせり水芭蕉

白石楠花硝子壊るゝごとく崩え

花胡桃もて囃さるゝ軽みの句

齒ごたえも修那羅育ちのこごみかな

親鳥とおもふ頭が見え燕の巢

からからに乾く畑土桃の花

若葉影諏訪明神のわたる橋

十薬の筒芽棒立ち選佛場

うねり出すぶだう若葉のみどりの炎

原木のあかとき色の花りんご

頭の内にまだ遊びゐるあめんぼう

本陣の螺鈿衝立緑さす
 袖にくる偏奇館忌の巷の風
 木雫を零し新樹のよき目覚め
 茹で玉子黄味ほつこりと山若葉
 棚奔るぶだう若葉のみどりの炎
 碌山館覆ふ若葉のみどりの炎
 信濃に入る磧いっばい五月の陽
 たらんぼにゆつくり廻る修那羅の日
 流水に流水逸るわさび沢
 冷え込みはもやもや芽吹く櫟より
 木の芽木の芽つくばねの容して
 湧水をぐるりと廻す花くるみ
 山滴る磧いっばい石敷きつめ
 朝月のいろを代田に張る水も
 ごごみ等も添へて野沢菜旬刻み
 畦々のたんぽぽ大き穂高晴れ
 海神を祖の杜の木の芽噴く
 しろしろと代田の泡も常念岳も
 本陣の石組に蝶羽根休め
 屋敷墓囲み櫟の芽吹き季
 花りんごお天道様を回しけり
 雪解山につこり天蚕紬店
 鼓虫の舞に合はせて頭振る
 鼓虫に伍して頭の回転も
 木杭に呪文かけられかいもちかき
 推力は抜群大型水馬
 山麓の木の芽霞に塔の立つ
 芽吹かんと櫟の構へ百通り
 やぼ粹と見比べゆけり木の芽いろ
 すいと身をかはず要領水馬
 薄日差りんごの花に太幹に
 新樹光神馬の胴に差し込めり
 相性よき穂高の水に鰍孵化
 淋しさは幾つ咲きても花わさび
 咲けば咲く程にわさびの花淋し
 あり余るわさびの花に来る夕べ
 流水の勢ひに乗じ蝶飛べり
 隣り田の蛙代掻き囃すなり

常念岳の膝下わさび田水走り
 常念岳のむつつり貌を代田水
 花わさび花乏しとも程々とも
 開きかけ頬紅いろの花りんご
 鈍色に花のりんごの太枝かな
 小流れのここまでわさびの花乏し
 代田引水たねつけば濡らす
 酸葉打ち安曇野の雨やってくる
 道祖神前の足跡さみだるゝ
 雨間近りんご花びら明るめり
 山葵田の何処どう奔る一流水
 わさびの葉潜り出て水鳴りにけり
 薄日差りんごの花もぼちぼちと
 田芥子の道行き過ぎぬ道祖神
 燕見て次なる村の道祖神
 道祖神祭り飲兵衛招び招ばれ
 寄り添へるりんごの蕾雨まみれ
 旅に出て三日わさびの花に逢ふ
 からまつは森の目覚まし芽を張れり
 わさび田を素通る水の垣間見ゆ
 本降りの代田に降りる鳥ありぬ
 山麓の日色を貰ひりんご咲く
 野をゆけば雪嶺の照り蜂の照り
 花をもつりんごの幹に雨の音
 花あけび雨うすずみに降るばかり
 代田に入る水音聞きをり道祖神
 常念岳の渋面雨の代田水
 山吹の花散りかかるわさびの葉
 道祖神辺りみるみる代田殖え
 川音にくるみもたもた紐を垂れ
 碌山館閉館の鐘若葉冷ゆ
 わさび田の水に一度は手を浸けて
 山葵田の雑草採りか雨の中
 わさび田より抜きし雑草迅く流れ
 もうすこし上に巢箱は懸くべきか
 雨いちめん代田蛙はこゑひそめ
 常念岳の映ゆる代田の泡は雲
 蜘蛛の糸すすつと見えてすすつと消ゆ
 極上の旬の山葵をおろしけり

出開帳堂暗がりにまごまごす

ご本尊垣間見るのみ御開帳

玉砂利を踏み鳴らし来て御開帳

芽吹くなり社の外の櫓等も

大寺に孫のさずかり武者幟

養鯉池浮草覆ひ始めけり

先細る人參小屋に五月雨

葉ざくらの葉末打つ雨八日堂

若楓大寺にいま灯の入る

蔦若葉碌山館をつつまんと

芽からまつ雨に冷気をひろげけり

安楽寺

崇福山朝の燕を放ちけり

本来の彩は斯くなる山ざくら

御印文頭をすいと差し出して

若葉雨おやきに腹の温もりて

かがんぼのやうな足どり石湯出て

早起きの燕のこゑす共同湯

ご門前独活の大束並べ売る

かがんぼの礎石を發てり国分寺

櫓芽吹き塩田平に拵げけり

緋桃の緋塩田平の雨を透き

見計らひ人出横切る御開帳

未完なる塔にしぶけり櫓の芽

昏れがての鳥のもう来ぬ山櫻

立ち寄りて善光寺さま御開帳

湯上がり戻りの道の朝燕

朝燕二羽みて二羽の睦みごゑ

湯上がりの夫婦に桂若葉かな

それそこがいもりの手にてここが胴

人の頭に伍して吾が頭も御開帳

乙鳥に乙鳥いろの人參小屋

朴朽葉紫がかる多宝塔

開帳寺門前臨時郵便局

御開帳頭突きだし御印文

石組と牡丹と獨鈷山の雨

湯どころの湯の香煽れる幟かな

葉ざくらどきふかふかの堂畳

露の葉を叩く山雨の三十棒

かいもちかき一円相を書きなぐる

まいまいのなむからかんのとらやあやあ

鬼くるみ中途半端に紐を垂れ

泉質を云々臚の共同湯

付け足しにりんご苗木も連なれり

歩むにも二泊のゆとり目借時

畦ゆけば代搔きどきの空のいろ

ころころとわさびの葉下奔る水

穂高晴れ蜂降る駅に降り立ちぬ

代田に引く水の咳き込むごとくなり

張る水はどぶろくに似て代田なる

ころころ鳴る水音にわさび花つけて

湧水にわさびの花のゆらゆらと

もんしろてふ山葵の畝を跨ぎそむ

十一面さんに葉ざくら伝ひの風

衝羽根のごとき櫓の芽吹きかな

吾には吾の好みのありて木の芽いろ

芽吹く櫓芽吹く櫓の杜かな

● HAIKU199706sono1

夏帽子被り始めの鎌倉行

十葉のむつと一雨ありさうよ

十葉は雑草に伍し六月へ

ややこしくなる前の蔓白南風に

立ち上がる葛の蔓さき夏の海

日蓮にゆかりの寺の今年竹

妙法華経山

粒選りの実梅安国論寺域

夏落葉泰山木を筆頭に

葉の混めるアンリルソ一の泰山木

珠なせる一念三千泰山木

ずらし見る泰山木の花の位置

あじさゐの色ならぬ色みえくる日

黄を少し加へあじさゐらしくなる

筒っぽの海芋は雨を蒐む花

六月のやすやす打たる蚊を見せぬ

山道を曲りばったり蛇莓

飛び込んで来たる最初の蛇莓

名越しの切通し

伏兵のごとき青齒朶切通し

反転し又反転し黒揚羽

見えぬ糸蜘蛛には見へて蜘蛛逃ぐる

かがんぼ過ぐやぐらを覗く顔の前

鴨足草せめて咲くとき丈高く

極楽の涼風来るよ楓樹下

タンポポの絮吹くための息の量

青桐の幹の葉混みに自若かな

梅雨といふ辟易月に入りにつけり
一通り聞きて入院梅雨海鼠

我が病ひは僧帽弁閉鎖不全なり
黴の世に心臓逆流せることも

黴どきの無精が無精産む寢床

東京の朝焼け入院一日目

東京の朝焼け少年退院す

一夜経し患者の吾に蠅が来て

易々と蠅にたかられ一患者

梅雨に病めば劣勢おおふべくもなく

術前の躰洗へる梅雨心

見舞客見送り梅雨の昇降機

七夕竹ナースセンター受付に

七夕の患者らパジャマに仰ぐ星

ギブス組涼みがてらの莫迦話

七夕の夜風にあたるギブス組

包帯に患部包める星祭

かがんぼ来夜間急患窓口に

隣人

外泊の許可貰ひをり星祭

おろしたてパジャマに夏の夜の更くる

胸板に夜風涼しみある患者

妻が見舞ひ呉れぬ四万六千日

浅草寺厄除け

病床に妻もたらしぬ雷除

妻

吾を見舞ふその足をもて朝顔市

幾そ度かがんぼ吾の採血よ

注射針ぬうつと太き昼寝覚

また注射此（こ）は夢の中いや現（うつつ）

声涼しく採血上手若先生

採血の跡黄味がかかる小暑かな

現そ身の採血跡の痣花火

採血跡痣の花火を咲かせけり

夏の夜の採尿採っても採ってもや

冷房裡青菜に塩の新患者

人參も余さず食ふぞ新患者

病棟の深夜冷房音どすん

俳諧オペ景色 へ病棟は水槽へ

**

烏賊医長やおら脈拍とりにけり

執刀日閻魔の斎日避けにけり

蛸博士（ドクター）腹式呼吸教授せり

麻醉科の水母先生注射せり

麻醉利き水母漂ふごとくなり

執刀はノコギリ鮫の某教授

ICU室

蘇る為の管吸ひ罌粟のゆめ

麻醉覚昼寝覚ではなかりけり

鹹（さより）嬢看護婦（ナース）寝起きの

声掛けぬ

白扇に茶化しきれざる病景色

**

術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ

下剤・剃毛全て済ませてすっぽんぽん

真っ裸辿り着きたる正念場

煮て焼いて呉れると海鼠たじろがず

闘牛のごと引出され手術（オペ）夏場

甚平が術後の吾を待つてをり

巴里祭当日手術

救命の管（くだ）のいろいろ巴里祭

管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭

ほぐれ初む麻醉の糸や脳涼し

家人と面会

冷房裡オペ顛末記筆談に

天蚕いろカーテンに覚む患者なり

患者たることは先づ起ち歩くこと
お通じてふ言葉涼しく懸けられぬ
お通じの回数間はれある夏暁
鼻より入る酸素すうすう昼寢覚
新聞売おばさんのこゑ明易し
新聞の字面おろおろ目が上がる
明易の酸素おろおろ吸入す
ナスコール夏暁をしどろもどろなる
術後十日重湯すすりて病ミ海鼠
暑き日の飯粒何處ぞ三分粥
夏の夜の痰取りしごともうんざり
痰取りがやつと終りて夜の秋
目覚めては患者の役を命ぜらる
朝風がいちばんうまし素裸に
声の主一体誰や昼寢覚
元氣出てかぼちやいろなる尿の色
豌豆に元氣づけられ今朝の飯
豆ごはんほつと安堵すその彩に
かぼちや出て大いに朝の食すすむ
のほほんと夏瘦どころか手術瘦
かうなつてしまつてシャワーは浴びずにお
く
骨伝ふシャワーに骨皮筋右衛門
患者等のわれらが宝庫冷蔵庫
床擦れに手こずり居れば夏暁の日
術後の舌何處ぞにメロンの味がする
見舞客勝手に変へて冷房「強」
病状は相も変らず朝曇り
素手素足ずいぶんすつきりした色に
見舞花の中にやあやあ松虫草
見舞花松虫草のありてこそ
心臓に如何（どう）手の入りて冷奴
八月四日
利尿剤利きに利きたる寅さん忌
昼寝せるゼブラ縞柄パジャマかな
包帯し術後の汝の博徒めく
笠智衆然たる患者ゆかた着て
話かいつまんで云へばと古扇

自宅にて養生始まる朝の蝉
ああと啼き死へまっしぐら夜の蝉
ゑのころの光れる試歩は朝の内
脚力をつけんとゑのころ草の道
海水着より大胆に海紅豆
諸の葉に大いなる穴開けし奴
一昨日の昨日の彩の風船かづら
風船葛朽色昔偲べとや
病み上がり足許いとどに跳ばれけり
簾打ち飛び去れるもの秋蝉か
朝蝉が啼かぬとある日来たりけり
水を掻く仕草も秋のあめんぼう
外野より声のとびくる力芝
かまつかの錦の御旗振るごとし
卓上に摘み来て咲かす烏瓜
月さして幽霊咲きの葉鶏頭
駐車場上の街空火花揚ぐ
蔦紅葉用意万端整へり
つくねんと秋場所をみる術後の身
秋寂びて縦一文字手術痕
養生も三月になりぬ万年青の実
積年のつかえがとれて出歩く秋
病閑やくわりんのおいど日を受けて

カテーテル検査入院 （平成十年四月
十六日）

昨夏の手術の確認の為のカテーテル検査で
再入院。入院箇所は手術病棟と同じ棟続き。
病室への途中 手術時の病棟を通りゆけば
妻の促す眼の先 個室の〇〇さんの文字。
彼の麻酔よりとうとう醒めなかつた隣室の
〇〇
さん。今もまだ麻酔より醒めぬままに……
検査結果は吾が心臓少し逆流せると。

薬で押さえて等と云われて退院。

入院前
食器には皆蓋のあり万愚節
入院も外泊の裡花見どき

閑中の閑愉しめと紫木蓮
何もって本復花の頃検査

花巡る旅をして来てさて入院
春の検査は心臓逆流せる具合

検査日の諸葛菜彩薄れけり
花季の入院支度板に付き

入院の荷嵩減らしぬ菜種梅雨
まづまづの経過辿りぬ紫菀

入院当日
術前説明

確率は交通事故死程なるも
この術例三百ほどと亀鳴けり

検査日の連翹明りに身の透けり
検査の為の検査蛙の目借時

目借時エイズ検査の承諾書
弥生のエイズ検査何卒ご了承ください

入院の傍ら夏着の妻がゐて
入院海鼠ざつと大部屋見渡せり

患者
夏物のパジャマに着替え一患者
けふより患者春宵何して過すべく

患者皆弥生の湯呑みに蓋をして
脇挟むが日課弥生の体温計

患者吾箸を洗へば暮れかねる
春の夜のまなぶた閉じて患者たり

隣の患者
春潮を吹き上ぐるごと寝息

浴衣着の患者パジャマの新患者
夏物のパジャマ引っ掛けギブスの上

骨折の患者活きよく夏は来ぬ
病み臥す身昼は海月に夜は海鼠

患者食

人並みの患者たるべく人參食ふ

患者食野菜尽しに春の彩

胡瓜揉み患者となりて一日目
患者食済みし春昼箸洗ふ

目に見えて体力戻る春大根
いっぱいしの患者顔して煮南瓜食ふ
春暁

春眠暁を覚え目覚めぬ大部屋に
春曙けふまで薬は自己管理

開口一番看護婦元気薬呉れ
回診の黒澤先生こゑ温く

春暁の目覚まし鳴らすほどの患者
患者春暁番茶のやうな尿をして

春あかつき小水の数問はれもす
大部屋

大部屋の消灯までの春灯
春の夜の寝息深淺ありて大部屋

春曙大部屋の端に目覚めけり
看護婦来て弥生の大部屋点灯す

弥生なる外科大部屋に朝が来て
花どきの大部屋患者起き出せる

大部屋の患者寝息の朧なる
春昼

春の昼医師は正面向いて話す
手術また一步進んで春の昼

新患者となりぬ春昼どう潰す
横臥してオペ待つ心臓の昼霞

亀鳴けり医術日進月歩の世
永日のそもそも何でこの病ひ

鳴神の電気浴ぶごと造影剤
超音波心電図を撮られて

羯諦（ぎゃあてい）と春の心音引き出され
春愁ふ心音増幅超音波

永日のはばかりもなく瘦瓶かな
尿（ゆばり）取る訓練堂に入る暮春

春夜

体温計鳴り出す春の夜のとばり
春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

春夜の読書いい加減にして消灯

尿溜むる春夜これより拾時間
春燈下患者複雑骨折譚
寝入る前もう一仕事春灯
春の夜を看護婦消灯触れ廻る
春夜起き出して尿足す大袋
袋透き春夜ため込む尿の多寡
尿出しに起てば病廊灯の朧
手術着に所詮独りとなる裸
点滴の終りを告ぐる朧ごゑ
春宵の点滴連れて立話
点滴の元気湧く彩朧夜へ
カテーテル検査結果 VTR
上映は如何な心臓の春景色
所見とて霞む心臓覗く昼
逆流ここ霞む心臓指さして
逆流なほ弥生の心臓調べみて
霞む中心臓僧巾弁の所作
術後
田鼠鶉と化すころあいを手術して
鷹化して鳩に術後の素顔なる
春深く牡丹いろなる注射痕
春の灯を術後のねむき顔に置き
教授回診掛くる言葉も涼しげに
春夜尿りて体外へ出す造影剤
昨年夏手術 懐古
シャワー浴び術後の垢の紙繕めく
退院の挨拶だぶつく夏ズボン
死神は退散氷うまかりき
もとどおりの心音戻り来て初秋
退院
退院の春の常着に手を通す
退院を云ひわたさるゝ春の果
退院の途次の暮春の中華蕎麦
退院して君子蘭待つ我が家なる

その他 囁目
出来過ぎの鱗てふ文字鱗季
芍薬の匂ひ詩囊を刺激せり
水靄の諏訪の下諏訪訪へば祭

御忌御忌と云ひて桜の鳥啼けり
否定語を使ひ損ねて亀鳴けり
掘割の花へ吹き上ぐ風上上
めいっばい咲く花濠の水まんまん
真つ白な花に群がる風一目
満開の心を一に濠桜
一滴の雨にも遇はず初ざくら
なかなかの櫻と幹に手を掛けて
あまりにも人間臭きくわりんの實
雨風に動ぜぬ花蘇鉄とはなれり
八重櫻ゆさぶつて地震ありにけり
鳴神の海渡り初む走り水

7月7日〜10月末

梅雨といふ辟易月に入りにつけり
一通り聞きて入院梅雨海鼠
我が病ひは僧帽弁閉鎖不全なり
黴の世に心臓逆流せることも
黴どきの無精が無精産む寢床
東京の朝焼け入院一日目
東京の朝焼け少年退院す
一夜経し患者の吾に蠅が来て
易々と蠅にたかられ一患者
梅雨に病めば劣勢おおふべくもなく
術前の躰洗へる梅雨心
見舞客見送り梅雨の昇降機
七夕竹ナースセンター受付に
七夕の患者らパジャマに仰ぐ星
ギブス組涼みがてらの莫迦話
七夕の夜風にあたるギブス組
包帯に患部包める星祭
かがんば来夜間急患窓口に
隣人

外泊の許可貰ひをり星祭
おろしたてパジャマに夏の夜の更くる
胸板に夜風涼しみゐる患者
妻が見舞ひ呉れぬ四万六千日
浅草寺厄除け
病床に妻もたらしぬ雷除
妻
吾を見舞ふその足をもて朝顔市

幾そ度かがんぼ吾の採血よ
注射針ぬうつと太き昼寢覚
また注射此（こ）は夢の中いや現（うつつ）
声涼しく採血上手若先生
採血の跡黄味がかかる小暑かな
現そ身の採血跡の痣火花
採血跡痣の火花を咲かせけり
夏の夜の採尿採っても採ってもや
冷房裡青菜に塩の新患者
人參も余さず食ふぞ新患者
病棟の深夜冷房音どすん

俳諧才へ景色 へ病棟は水槽へ

* *
烏賊医長やおら脈拍とりにけり
執刀日閻魔の斎日避けにけり
蛸博士（ドクター）腹式呼吸教授せり
麻酔科の水母先生注射せり
麻酔利き水母漂ふごとくなり
執刀はノコギリ鮫の某教授
ICU室
蘇る為の管吸ひ罌粟のゆめ
麻酔覚昼寢覚ではなかりけり
鍼（さより）嬢看護婦（ナース）寝起きの
声掛けぬ
白扇に茶化しきれざる病景色

術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ
下剤・剃毛全て済ませてすっぽんぽん
真っ裸辿り着きたる正念場
煮て焼いて呉れろと海鼠たじろがず
鬪牛のごと引出され手術（オペ）夏場
甚平が術後の吾を待つてをり
救命の管のいろいろ巴里祭
管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭
ほぐれ初む麻酔の糸や脳涼し
家人と面会
冷房裡オペ顛末記筆談に

天蚕いろカーテンに覚む患者なり
患者たることは先づ起ち歩くこと
お通じてふ言葉涼しく懸けられぬ
お通じの回数問はれゐる夏暁
鼻より入る酸素すうすう昼寢覚
新聞売おばさんのこゑ明易し
新聞の字面おろおろ目が上がる
明易の酸素おろおろ吸入す
ナースコール夏暁をしどろもどろなる
術後十日重湯すすりて病ミ海鼠
暑き日の飯粒何處ぞ三分粥
夏の夜の痰取りしごともうんざり
痰取りがやつと了つて夜の秋
目覚めては患者の役を命ぜらる
朝風がいちばんうまし素裸に
声の主一体誰や昼寢覚
元気出てかぼちやいろなる尿の色
豌豆に元気づけられ今朝の飯
豆ごはんほつと安堵すその彩に
かぼちや出て大いに朝の食すすむ
のほほんと夏瘦どころか手術瘦
かうなつてしまつてシャワーは浴びずにお
く
骨伝ふシャワーに骨皮筋右衛門
患者等のわれらが宝庫冷蔵庫
床擦れに手こずり居れば夏暁の日
術後の舌何處ぞにメロンの味がする

見舞客勝手に変へて冷房「強」
病状は相も変らず朝曇り
素手素足ずいぶんすつきりした色に
見舞花の中にやあやあ松虫草
見舞花松虫草のありてこそ
心臓に如何（どう）手の入りて冷奴
八月四日
利尿剤利きに利きたる寅さん忌
昼寝せるゼブラ縞柄パジャマかな
包帯し術後の汝の博徒めく
笠智衆然たる患者ゆかた着て
話かいつまんで云へばと古扇

自宅にて養生始まる朝の蟬
ああと啼き死へまっしぐら夜の蟬
ゑのころの光れる試歩は朝の内
脚力をつけんとゑのころ草の道
海水着より大胆に海红豆
諸の葉に大いなる穴開けし奴
一昨日の昨日の彩の風船かづら
風船葛朽色昔偲べとや
病み上がり足許いとどに跳ばれけり
簾打ち飛び去れるもの秋蟬か
朝蟬が啼かぬとある日来たりけり
水を搔く仕草も秋のあめんぼう
外野より声のとびくる力芝
かまつかの錦の御旗振るごとし
卓上に摘み来て咲かす烏瓜
月さして幽霊咲きの葉鶏頭
駐車場上の街空花火揚ぐ
蔦紅葉用意万端整へり
つくねんと秋場所をみる術後の身
秋寂びて縦一文字手術痕
養生も三月になりぬ万年青の実
積年のつかえがとれて出歩く秋

HAIKU199711sonoi

やうやうに俳句をつくれるやうになりました

このにほひ一体何や酉の市
下駄履きに一の酉立つ真金町
歩かぬは万病の因（もと）花八つ手
焚火婆落葉臭さを曳きにけり
渋柿と言はずもがなの照りつぶり
仁王門脇の櫂の初紅葉
落葉焚婆が落葉をてんこ盛り
御奉納お大師さまの菊花壇
くりつくり栗キントンの黄菊なり
桐の実にお酉さまの日差しにけり
櫂の脇落葉の袋詰
八重桜団扇太鼓に紅葉せる
作麼生（そもさん）と実ざくろ問ひ掛けく
るごとし
鶏頭は枯れて一心欲見佛
反橋を映して水の澄みにけり
俳諧は極楽文学石路は黄に
冬菊のいちめんそれも麴（こうじ）色
朝鴟に起居の睫毛ぱしぱしと
枯蟻螂振り上ぐ汝の斧仕舞え
山茶花のちりぢり後の祭かな
いぼむしり近づくものを目の敵
早咲きのこの菊オーソドックスな
草紅葉蛇口ひねれば鳴りにけり
砂場の砂波立つままに冬の暮
狗尾草（えのころ）に透るや秋の日が透る
また一つ家毀たれて冬の星
小春の象ワルツステップ踏むごとし
羚羊の砦の蔦も紅葉せり

町内の左官屋の菊三色（みいろ）ほど

ふるふると虫の羽根打つ石路の花

朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ

ため息を一つつくごと帰り花

天然寺風格の出で石路の花

帰り花後生大事といふ一語

消印はグアテマラクリスマスカード

枯蔓のあれば引つ張り寄せて見ぬ

朴落葉二枚もあれば山土産

板敷きの反橋露を零さざり

意地っ張り大枯蓮の往生際

傷持ちの苑の櫛も紅葉せり

ぞんざいに桜もみぢの散るばかり

臍物の如き朝刊取りに冬

百日紅尾羽打ち枯らしみる月下

願望

茶の花に跡形もなき後遺症

秋草の雑多なる色風吹ける

ユウカリの日本離れしたる秋

残菊は残菊打ち降る雨は雨

ポインセチア並べ商戦たけなはに

女貞一雨毎に實の黒む

野毛山動物園

秋霖と砂に呟くマレーバク

紅葉坂 伊勢山皇代神宮

七五三あっさり組と凝り組と

樟脳の香のセーターに隣りして

柗の蒼ひっそり雨あがる

水の面に桜紅葉の心ばえ

アナグマに落葉臭さと尿くささ

落葉手にとり霊長目人間（ひと）科人間（ひと）

アムール虎右往左往の黄落期

海に向くからかねの門七五三

野毛山の桜もみぢの匂ふこと

男の子好きな恰好で七五三

千歳飴ここを先途と着飾りて

もどかしく磴を登るも七五三

水上にアザラシの息うそ寒し

アザラシは桜落葉の下潜り

うそ寒く本土キツネに覗かるる

おねだりの僕は僕はの七五三

紅葉いろオランウータン体毛も

蔦紅葉大方見頃過ぎてをり

秋寂の角が動いて日本鹿

執念をもちてくわりんも秋日に耐ふ

くわりん落つ落つるとおもひぬし矢先

江ノ島 龍ノ口竜口寺

堂前に靴の累々御命講

海段丘鏽断層に石路の花

葛黄葉遠慮がちなる色合ひに

据えられて張り出しのよきお万磴

お婆らは雨具抱へて日蓮忌

停車せる江ノ電の黄と石路の黄と

鳥々も連れ立ちご宗祖日蓮忌

一軒家置いわしを干す生活（たつき）

冬蠅来置いわしの干し簾

二々もとの大万磴の堂明り

祖師さまに樽積みの御酒御命講

御命講鳩の目をして祖師さまは

● HAIKU199712sono1

今月は宇都宮に用事があつたついでに
養生を兼ねて温泉へ。

インターネットで探したらこれまた便利。
快適な宿が格安なお値段でみつけた。
インターネットの客はワインボトル一本つ
いて

料金割引。露天風呂あり。サービスも手篤
い。

その名も塩原八峰苑。

――
――

沢鳴りに寝落ちぬ吾も木っ葉なり
一飛雪ひゅうと川面をよぎりけり
一幅の絵やせきれいと一飛雪

枯蔓へ枯木へ山の湯の煙

はをらんとしたる肌着に凍む山気

養生自画像

枯木見つつ湯壺へ骨皮筋右衛門

旅仲間雪つこといふ濁り酒

川向ふ今しも木の葉時雨かな

残る葉を数へて枯木のプラタナス

次々降る山の木の葉と歩を一に

宿々の木々の天辺冬日向

山宿の灯影漏れをり涸川へ

冬ざれの肩より暮るる畑鴉

あらあらと鶴発てる実南天

実南天青空深く弾けたり

夕凍みの大岩畳たる水

しろしろと雪の気配の枯木山

山宿の玻璃戸越しなる冬木の芽

涸川の涸れ灌木に移りけり

山宿の暖房音の中に寝落つ

枯木宿畳あかるく灯の入りぬ

橋一つ向かふがけふの枯木宿

涸谿に雪舞ひ込んで舞ひ込んで

まなごこに止む初冬の滝のいろ

絶え間なく音のしてゐる暖房室

朽葉のうへ枯葉露天の湯壺の辺
はじめての雪山々の滝々に

梅擬宿の主の好意かな

湯煙の上がる辺りに冬木の芽

黒凍みの川水離れ岩削ぎに

すつぽりと湯町の入る冬日向

ぞんぶんに落葉踏み来て身を癒せ

ふかふかの落葉包める河原石

ここらまで飛び来初冬の滝しぶき

山宿の灯に浮く枯木ほの白し

山中の露天湯への道落葉道

枯木風湯壺のうへを吹き抜けり

枯山の木っ葉臭さに染まり来ぬ

露天湯の磐座の上の朴朽葉

ひよこひよここと枯るる中来て露天湯に

顔搏つて山の初雪ぱらりと来

落葉踏みしめて初冬の木漏れ日道

谿浅く谿また深く落葉径

山宿の畳も枯れに入る頃ぞ

脱衣籠擗落葉の一二片

雑木山枯木の間の樅の青

冬の水滑る岩床暗紫色

湯の香とも木っ葉の香とも時雨宿

枯山の枯れのそこまで白障子

寝ねかてに暖房音と溪流音

いち早く湯の街暮るる花八つ手

この谿の落葉づくしの径滝へ

路線バス

枯れ木っ葉臭き湯町の子が乗り来

日当たる山枯木を花と咲かせゐて

露天湯のまはりぐるりと枯木空

雪片をすいと引き寄せ一枯枝

露天湯に生國問はれをる初冬

露天風呂冬青空に首を容れ

山宿の背山枯れよと夜の疾風

聞けば此処鴨の天国箒川

川縁の鴨の口々雪来ると

脱衣せるときに目にせる枯木山

岩床の湯垢赫々冬に入る

食堂のポインセチアに宿賑はふ
対岸へ時雨のありし道替へて
枯れ木つ葉臭き身横たへ今日果つる
一々時雨木つ葉臭さのいよいよや
涸川を夜来の雨の渡る音

二代目高尾は

塩原高尾・万治高尾・妙身高尾とも云はれた
辞世 寒風にもろくもくつる紅葉かな
朽つもみぢ踏みて塩原高尾墓所
高尾墓所頭上を枯木風吹けり

目覚めたる鼻先宿の厚蒲団
枯木山続きに物見遊山かな
山宿の枯木明かり湯壺に居
枯れに入るここら岩塩採れし山